

詩の〈動植物園〉

—— マリアン・ムーアの作品14篇 ——

森 田 孟

マリアン・ムーア (Marianne Moore, 1887-1972) の最も充実してきた時期の作品には、それ以前にも以後にもまして、彼女得意の動植物が、詩作に種々様々に活用される。そういう作品の中から、本稿では、長篇のものを主を選び、それ以前の若干のもの共々、十四篇を邦訳して紹介し、その詩作の実態・様相を垣間みてみたい。ムーア総合論の前提の作業である。『完全詩集』*The Complete Poems of Marianne Moore* (1981) を定本にし、その巻末に付されている彼女の自注を各詩編の後に付載する。その際、原詩にはない注の番号を便宜のため本文の該当部分につける。尚、本稿の筆者の注は [] の中に入れる。

*

トビネズミ The Jerboa

(CP. 10-15)

多スギル Too Much

ローマ人は芸術家に、
自由民に、考案させたのだった
円錐形のを——松の毬果
もしくは樅の毬果を——噴水の穴のために^①。聖アンジェロの
牢獄に置かれて、今はボウプス家の
ものとして知られているポンペイウス家の

この毬果は、芸術として
通用している。巨大な鑄造された
青銅は、ヴァチカン宮殿の庭の
孔雀の像を小さくみせながら
それは与えるために造られた芸術作品のようにみえる

一人のポンペイウスに、もしくはテーベの

国民に。他の人々は
建てることが出来たし、理解したのだ
巨像を造ることと
奴隷の使い方とを、そして鰐を飼い、ヒヒを
キリンの首に乗せて果物を
採らせ、蛇魔術を使った。

彼らは部下たちに
河馬を縛らせ、
ぶちの 犬＝猫 たちを連れて来させて
アンティロウプ、ディクディク、アイベックを追わせた、
あるいは小型の鷺を使った。彼らは自分のものだと看做したのだ、
インバラを オナガーを、

野生のダチョウの群を、
それらは堅固な足と鳥の
首を備えているが 首を後ろへ埃の中で
持ち上げるのだ、鶴を、マングースを、コウノトリを、アノアを
ナイルガンを襲おうと身構えている蛇のように、
そしてこういうものたちのための庭があった――

スズカケノキ、ナツメヤシ、
ライム、それにザクロといった
街路の木々を――ナデシコの花、
飼い馴らした魚、そして小型の蛙のいる四角い水溜りと結合しながら。
インディゴ藍で染めた織り糸や 赤い木綿の他にも
彼らは亜麻を持っていて それを

美事なりンネルのロープ索具へと
ヨット操縦者のために紡いだのだ。
こういう人々は小型のものを愛好した、

彼らは少年たちに 小さな対の遊具を与えた、例えば
複数の卵の入った巢、エジプトマンゲースと蛇、櫂
と筏、アナグマと駱駝を。

そして自らのためには
玩具を作った、王者のトーテム像を。

そして中身の分る印つき
化粧具箱を。貴族と貴婦人はガチョウ脂の
絵の具を丸い骨製の箱に入れる——その軸で旋回する
蓋にはアヒルの翼か

先祖返りしたアヒルの頭で
銘が彫られていて、雄鹿か
犀の角、
研がれた角の中に保持されている。そしてイナゴ油は石製のイナゴの中に^②。
それは美事な遠景のある絵であった。
干魃についての、時を得た

援助についての絵で、ナイル河から
ゆっくりと昇ってくるのだった、一方、
厚板の前肢に頼る
おさげ髪の猿は、上へ弓形にだらしなく吊り下った足取りをし、褐色の
めかし屋は見ていた、ジャスマンの二枚葉の小枝と
芽、サボテンの柔らかい膨らみとイチジクを。

あちらこちらで小人が与えていた、
蛙の灰色をした
アヒルの卵の緑色をした
ナスの青色をした明白な詩に 幻想と
尤もらしさを、それらは到る所で
貧しい人々に権力を揮う

連中には相応しかった。

蜜蜂の食べ物 は あなたの
食物である。花壇と家畜小屋の
世話をする人々は 手の形をした
王の杖^③ のようなものか 彼の愛する母親の
ために作られた囲い込み式の

寝室^④ のようなものだった。端のところが
震えているオランダカイウかペチュニアの
白色の女王の衣装を
着ている王子たちと、蜜蜂飼いや乳搾り女のように
蚕の天蚕糸^{てぐす}のような細い綾織り糸の
王のペティコート^{てぐす}を身に着けている

女王たちは、神聖な牛と
蜜蜂を飼った。石灰石の眉と
金箔の翼だ。彼らは玄武岩の
蛇と甲虫そっくりのものを作った。王は
自分の名をそれらに与え、彼はそれらに因んで
名付けられた。彼は蛇を恐れ、

ファラオの鼠を、錆色の背の
マンガースを、飼い馴らした。その胸像は
全く作られなかったが、鼠への
喜びはあった。その落ち着きのなさが
その優れた点であった。それはその持ち前の機智の故に賞讃された、
そしてトビネズミは、それと同じ様な

小型の砂漠の鼠^⑤ で
有名ではないが、水が
無くても生きてゆくので
幸せである。外に出て食べ物^{あさ}を漁るか、家では
その巢穴^{あさ}にいて サハラノネズミは
輝く銀色の家を

持つ。おお、安息と
喜びよ、果てしなき砂よ、
途方もなく巨大な砂柱よ
水がなく、棕櫚の木がなく、象牙の墓床がなく
小さなサボテンだけ。だが、人は 豊富以外
何も持たない者にはなろうとしないだろう。

アリ余ルホドノ量 *Abundance*

アフリカヌスとは ローマから
送られてきた征服者の
ことだった。それは 傷つかぬ者
も意味する筈だ。その砂褐色の飛び跳ねる鼠——自由の身に生れた、そして
黒人たち、人の無知によって無視された
あの優雅を身に付けた高級な人種。

一部は地上に、
一部は天上に、
ヤコブは見たのだ、棍棒杖を
鉤爪の手にして——空気の階段と空気の天使たちを、彼の
友人たちは石だった。砂漠の
半透明の見誤りも 苦難とは

ならないのだ。休息することが出来て
それから その真反対のことを
果せる人には——飛び立ってゆくのだ
まるで翼に乗ったみたいに、そのマッチ棒の細さの後脚から
昼日中 あるいは夜に。重しのような尾を
速度のせいで波打たせながら、真直ぐに。

昼の光で見られると
その下側は白い、
尤も背中 of 被毛の方は

揉み皮の淡黄色で 子鹿の胸色をした
ニワシドリの胸のようだが。それは子鹿の胸のように弾むが
シマリスの輪郭を持ち——それが鳥の頭を

巡らせると、それと気付かれるのだが——
その短い柔毛は きちんと
後向きになっていて 身体の細さを
そっくりなぞっている耳と
混ざり合っている。尾の細かい毛は
他の淡い色の模様を

反復しているが、長く伸びて しまいには
先端では膨れて
房毛になる——黒と
白の。単純化された生き物の不思議な細部、
魚の形をして、大きな砂漠の月の
力によって銀色になり銅鉄^{はがね}となる。追い回してみよ

トビネズミを、あるいは
掠奪してみよ その食物貯蔵庫を、
そんなことをすれば 君は呪われるだろう。それは
砂の名誉を 砂色を身に帯びることで讃えているのだ、
危険から逃げる際には
前脚を閉じて被毛と一体となるようにみえる。

五音程と七音程で
体長の二倍の長さずつ飛びながら
ベドウィン族のフルートの
一様でない調べのように、それは小さな脚車で
その落ち穂拾いを止めて カンガルーの速度で
シダの抱子の足跡をつける。

その跳躍はフラジヨレットに

合わせて行われるべきだろう、
 柱状の身体が直立しているのは
 三つ角の滑らかに作動するチッペンデイルの
 鉤爪の上——後ろの両脚と第三の爪先としての尾に支えられている、
 自分の巢穴へ跳躍してゆく間を。

——*Hound and Horn*, 7 (October–December 1932) 108–13.

[自注] ① 「穴を幾つも貫き通されて、それは噴水の役をした。その銘には『P.Cincius P. I. Salvius 作る』とある。Duff, *Freedom in the Early Roman Empire* [『初期ローマ帝国の自由』参照]。The Periodical, February 1929 (Oxford University Press).

② 第22エジプト王朝の頃からの化粧箱。Illustrated London News, July 26, 1930.

③ J. D. S. Pendlebury による描写。Illustrated London News, March 19, 1932.

④ Hetepheres 女王が息子の Cheops にもらった持ち運べる寝室。Dr. G. A. Reisner による描写。Illustrated London News, May 7, 1932.

⑤ 「マッチ棒のように細い長い後脚で走るトビネズミと呼ばれる小型の鼠がいる。その前脚は唯の小さな手である」。Dr. R. L. Ditmars, *Strange Animals I Have Known* [『私が知った奇妙な動物たち』] (New York: Harcourt, Brace, 1931), p. 274.

ポンペイウス家は、将軍・政治家で第一回三頭政治の首脳 (106–48 B. C.) を出しているローマの名門。テーベは、古代ギリシャ Boeotia の都市国家。アテネ及びスパルタと勢力を競って紀元前四世紀の前半に Epaminondas の下にギリシア全土を支配するに到ったが、アレキサンダー大王の軍に滅ばされた。

自由民は、奴隷の身分から解放された人のことだが、米国では南北戦争後に解放された黒人である。ここでは無論前者であるが、黒人を「高級な人種」と呼んでいるようにローマ時代の話柄が主題の詩ではない。

アンティロウブは、羚羊で、アフリカやアジアに生息するシカに似たウシ科の動物の総称。ディクディク (dikdik) は、ロイアルアンティロープ亜科のディクディク属の羚羊の総称、アフリカ東部産で兎ぐらいの大きさ、角が小さい。

アイベックス (ibex) は、ヨーロッパ、アジア、アフリカ産のヤギ属の野生ヤギの総称。インパラ (impala) は、アフリカ産大型羚羊で、臀部に黒い三カ月形の斑紋がある。オナガーは “oniger” となっているが、“onager” のこととみておく。中型の淡黄褐色の馬。ヒヅメに黒っぽい輪郭があり、背の縞が尾の先まで続き、頭の後部が短い。北部イランの高原に生棲する国際保護動物。

アノア (anoa) は、Celebes 島産の矮小水牛。水牛に似ているが角は真直ぐ後方に伸びる。エジプトマングース (ichneumon) は、アフリカに生息するイタチに似たジャコウネコ科の小動物。ワニの卵を食べると古代エジプト人は信じたが、主に小哺乳動物、鳥、爬虫類などを補食する。

1932年に、ムーアの兄 Warner は仕事で Samor 島に出かけ、これは殆ど三年に及ぶ旅になるが、彼女は兄に盛んに手紙を書き、特にマングースへの興味を示した。マングースは “ichneumon” のことだ、とこの年の六月に書いたが、丁度この時期に、この作品に彼女は集中していた。母親は、ムーアが、この詩作に熱中していて朝食にも降りて来ないとウォーナーに知らせた程である (Mo. 256-57)。

砂柱 (sand-spout) とは、砂漠地帯で旋風の巻き上げる砂の竜巻をいう。

アフリカヌスには、ローマの将軍・政治家で、第二次ポエニ戦役でカルタゴの名将 Hannibal を Zama で敗北させた (202 B. C.) 大スキピオ (Scipio) (237-183 B. C.) と、その養孫で、第三次ポエニ戦役でカルタゴを包囲して滅亡させた小スキピオ (c185-129 B. C.) がいる。

ベドウィン (Bedouin) は、アジアやアフリカの砂漠地方で遊牧生活を送るアラビア人。

フラジョレット (flageolet) は、六箇の音孔と嘴状などの歌口のある縦笛。

チップendale は、18世紀の中葉から後期にかけて流行した曲線の多いロココ調の家具の代表的な装飾様式で、英国の家具設計・製作者 Thomas Chipendale (1718?-79) に因む。

トビネズミ (Jerboa) は、北アフリカやアジアの乾燥地に棲む夜行性のトビネズミ科齧歯類動物の総称で、後肢と尾が長くて跳躍に適した姿をしている。

この作品は、ムーアの多くの〈動物詩〉の中でも殊の外「科学的」な細部に溢れた (Mo. 257)、彼女の面目躍如たる寓意詩で、複雑な構造によって主題の意匠の読解は、読者に任せている趣きがある。ムーアの母は、その息子ウォーナー (ムーアの兄) に、この詩の主題は、禁欲的な君主ではなくて、贅沢を愛好する隣人たちとは全く異なって富や宝石類に圧迫されている気高い人物だ、

と語った (Mo. 258)。動物はフラジョレット (自分の詩を表わす暗喩) に合わせて動くべきだと述べることで、ムーアは、自分が、野心や奢侈への誘惑に氣を取られることなく、自らの詩の必要と発展に即して行動すべきことを示唆しているのだと、モウルズワースは言う (Mo. 258)。

二つの小見出し (「多スギル」「アリ余ルホドノ量」) や、「人は豊富以外 何も持たない者になろうとはしないだろう」(one would not be he/who has nothing but plenty) というひねった言い回しの詩句が、自ずとこの作品の主題を語っているだろう。

この詩で言及される動物は、トビネズミを含めて合計37種類、植物は、ナスや亜麻など合計16種類。さながら、詩で展開された動植物園を、読者は瞠目しながら引き回されることになる。

読書で得た知識・情報を、連想によってぱっと嵌め込んで、作品を震動させ揺らせて広く深く膨らませるのも、ムーアの常套手段である。動植物の生態の細部描写に動植物を持ち出して使う (例えば、「子鹿の胸のように弾むがシマリスの輪郭を持ち」、「カンガルーの速度で シダの抱子の足跡をつける」等) のなども、本稿の諸篇は無論、ムーアの殆どの作品の重要な特徴の一つである。

この詩は、行頭にこれもムーア特有の出入りのある形態の六行詩で、26連全て同型であり、一行目と二行目、五行目と六行目が一つの例外もなく全て押韻する美事な形式美の作品である。

この作品を完成して間もなくの八月下旬、彼女は Macy 百貨店の飾り窓の中に、極彩色の椿の花を示すフランスの芸術書を見つけた。それが次の詩となり、かねてから作品を求められていた Ezra Pound 編集の詩華集に送ったのである (Mo. 259)。

サビー二椿 Camellia Sabina

(CP. 16-18)

と ボルドー李とは
 括弧の中に (フランス) とあるマルマンドからで
 壺の基部には A. G.——アレクシス・ゴディロ——と
 光にかざすと緑色になる泡のそばに
 不揃いに吹き付けられている。この両者は
 美事な二重奏だ。その螺子蓋^{ねじ}付きの瓶は
 ブラックサンザシの黒みがかった赤色の上で

この接木で育ったブライアの黒の花用だが、
チュルトサのように 箔で封をされている。適切な風習だ。

そして彼らは ガラスの
下にも葉に幾本かの線を引いて椿をカタログにして
保持している。フランス人は残酷な人種だ^①。——進んで
食事の客のキュウリを搾ろうとしたり、蔓の若枝に乗せて
粗びき粉を炙ろうとする。〈グロリア・マンディ〉は
二インチの葉、幅広の線を九本
備えているが、彼らはそれを持っている、そしてもっと小さい
サビーニ椿には
テングタケの白い花卉がある、それには幾つか

淡い色の玩具の風車がある。そして淡い色の
縞は まるでキノコの上に
薔薇に彫り出されたビートの根の裂片が置かれているように見える。「窓々を
棒にしっかり括り付けた布で乾かしなさい。
椿の家には在ってはならない、
ストーヴからの煙や、窓々に
露は、その植物が病気になっては困るから」
素人はそう教わる、
「間違いは取り返しがつかず、何をしても無駄になるのだから」と。

匂わない小さな花の束が
こうして瓶、大樽、コルクから花束の真中に
形作られる、6,400万本の赤葡萄酒と
2,000万本の白葡萄酒のために、それをボルドーの商人^②
と法曹家たちが、ボルドー物とそうでない物とから
選び出すのに、「多大の骨折りを
してきた」のだった。食用葡萄^③は
しかしながら——「自然と
芸術とから生まれる」——葡萄祭りの真正な根拠である。

国々によって
野生の鼠の食料は、野生のアメリカボウフウ[㊤] かヒマワリか
朝顔かの種子で、時には
葡萄である。イタリアのボルサーノ葡萄の
蔓の下では〈尻尾の王子〉が
ぶらついているかも知れない。あそこの、片手に
葡萄を、口に子供を銜えている鼠は[㊤]
首にぶら下げるスペイン織物の
図柄にならないだろうか？ あなたの頭上の

あの充分積み上げた
食料戸棚には、あなたが食べるものの絵が
大通りの端から見える。金網張りの檻[㊤]は、
錠が下りているが、屈んだり屋根をよくよく
眺めれば見ることも出来るだろう
ペルシャ思考の無言劇を、金ぴかの
きつすぎる落ち着いたきのない
雨にも減びない宝石の
上着——成熟することを拒んだ各々小さな翡翠の丸石は

微妙に引き
離されている。宝石類から離れても 棲み処の
イタリア高地で、騎兵隊士官候補生ハタネズミの
〈親指トム〉が 光を遮られて
葡萄を見ることが出来ないとか
テントの馬術競技や^{コンクール・イ・ピック}
緑の天蓋の青空からの他の影の周りを
鰻、ホタテ貝、蛇のあたふたぶりで
激しく動き回れなくなったりはしないのだ。

葡萄酒貯蔵室？ いいえ。
それは何事も成し遂げず 魂を
重くする。落ち穂拾いは葡萄の収穫に優る、唯、

〈葡萄と葡萄酒〉の歴史は
ミラベル酒を1797年〈以来
比類ない図書館〉に据えてきたけれど。

（窓を閉ざせ

と あのベルレーズ神父は言う、

ガラスの下で生れたサビーナのために)。おお、寛大なボルサーノよ！

——*Active Anthology*, ed., Ezra Pound (London: Faber & Faber, 1932), pp.189-91.

〔自注〕The Abbé Berlièse, *Monographie du Genre Camellia* [『椿種属に関する専門論文』] (H. Cousin).

① J. S. Watson, Jr., 非公式見解。

② ボルドーの商人たちは多大な骨折りをしてきた。*Encyclopaedia Britannica*. [“Bordeaux” の項に出てくる]

③ Vol. 1, *The Epicure's Guide to France* [『フランス食通案内』]

(Thornton Butterworth) の中で, Curnonsky と Marcel Rouff は Monselet を引用している, 「他のどこでも, 熟して葡萄酒になる葡萄を食べる。フランスでは, 食卓用に熟した葡萄を食べる。それらは同時に自然と芸術との産物である」。房は, 「熱の強さに従って, 交互に覆われたり覆いを外されたりして, その葡萄を焦がすことなく金色にする。熟すのを拒むものは——しかも常に幾らか存在するのだが——雨で駄目になってしまったものも受ける処遇だが, 特別の鉢で微妙に取り除かれる」。

④ Edward W. Nelson, “Smaller Mammals of North America,” [「北米の小型哺乳類」], *National Geographic Magazine*, May 1918.

⑤ Spencer R. Atkinson 撮影の写真, 同上, February 1932. 「口に赤ん坊を, 右手の前節に葡萄を持ち運んでいる尾の丸いモリネズミがこの写真になった」。

⑥ Massachusetts 州 Attleboro の Alvin E. Worman 撮影の写真。

マルマンド (Marmande) : 南西フランスのガロンヌ川畔の町。

ブラックサンザシ (black-thorn) : 北米産の山査子的一种, あるいは, ヨーロッパ産サクラ属のリンボク的一种, ここでは後者か。

ブライア (briar) : フランス及びコルシカ島に産するツツジ科エリカ属の

低木。その根はパイプ製作用に最適といわれる。

チェルトサ (Certosa) : 1086年 St. Bruno がフランスの Grenoble 付近の Chartreuse 山中に開いた戒律の厳しいカルトゥジオ修道会の「修道院」。

グロリア・マンディ (Gloria Mundi) : 大地の栄光。植物の名、未詳。

〈親指トム〉 (Tom Thumb) : 英国の童話作家・挿し絵画家 Beatrix Potter (1866-1943) の *The Tale of Two Bad Mice* (1904) に登場する人形の、家を荒し回るいたずら雄ネズミ。

ミラベル酒 (mirabelle) : 黄色い芳香の強いプラム (李) で造った蒸留酒。

サビーニ (Sabine) : Rome 北東部の Appennine 山脈地方に住み、紀元前 290年頃ローマ人に征服された古代民族。「サビーニ椿」と仮に邦訳しておく。

フランスのプラムブランディの瓶に差した椿の花を、瓶と共に詳細に観察した、「目論まれた見せかけのもの」への批判・攻撃の詩で、主題は「トビネズミ」と同種だとエンゲルは見る (E. 49)。飾りにはなっても役に立たない、それでいて甘やかされている椿の花と、食用にもなる葡萄酒用の入念に栽培された葡萄とを対比して後者の方を望ましいとし (E. 48)、イタリアの葡萄を讃美して結ぶ (E. 49)。作品の主題は「落ち穂拾いは葡萄の収穫に優る」であり、人工的なものを告発し、自然なものを讃えている (C. 101)。骨折って栽培される室内の椿と「野生鼠の食用」になるボルサーノ葡萄、この葡萄とボルドーワイン、椿とボルドー李、などの対比によって、栽培されてガラスに閉ざされる花を告発し、畑で鼠の食用となる葡萄を讃えている (Ho. 89-90)。と、似たような見方がされている。ムーアの空想や連想は、花や葡萄からも直ぐに鼠へと、やはり〈動物〉に及ぶのである。

一連九行から成る八連の作品で、各連共、一、七、九行目が正確に押韻する他、各連共、例えば最初の行は全て五音節、八行目はどの連も六音節から成る、など、音の点でも瞠目すべき〈芸術品〉である。

以上二篇の主題がやはり現われている (E. 49) と見られるのが次の作品である。

そんなに美事な白鳥はない No Swan So Fine (CP. 19)

「ヴェルサイユの枯れた噴水ほど

静止した水はない」^①。白鳥はいない、
浅黒く視力のない横目をし

両脚がゴンドラを漕いでいるそんなに美事なのは、
 チンツで飾ったその磁器のようなのは、それは子鹿の
 淡黄褐色の目をして歯状突起のある黄金の
 首輪をはめて、それが誰の鳥だったのかを示している。

ルイ十五世の枝付き燭台の
 鶏冠の色合いの
 ボタンの付いた、ダリアの、
 海胆の、永久花の、木の中に置かれて
 それは座を占めている、磨かれた
 彫刻された花々の枝分れしている
 泡の上に——寛いで丈高く。王は死んだ。

——Poetry, 41 (October 1932), 7.

[自注] バルフォー卿 (Lord Balfour) 所有のマイセン [ドレスデン付近の]
 磁器の白鳥が付いた一對のルイ十五世枝付き燭台。

① Percy Philip, *New York Times Magazine*, May 10, 1931.

チンツ (Chintz) は、木綿サラサ、派手なプリント模様の厚手の木綿地、
 インド捺染綿布。海胆 (sea-urchin) は、無論、この燭台の木の装飾の譬喩で
 ある。“sea-urchin”には、ハリネズミのように棘がある豪州産のヤマモガシ科
 ハケア属の常緑低木、の意味もある。

永久花 (everlasting) は、乾燥花ともいう。キク科のムギワラギク属やチ
 チコグサ属の植物など乾いてからも形や色の変化しない花のこと。

バルフォー卿の所有物が競買に付される報に接して、ルイ十五世が愛でた
 凝った燭台に興味を抱いたムーアの作品である。飾りとして付いている磁器の
 白鳥は、生きている鳥を思わせる程に写実的で、彼女は、第一連でのこの飾り
 物の白鳥と対比している。最終行は、磁器の白鳥は生きているようにみえるの
 に、その元の所有主である王は死んでいることを示して、“——at ease and tall.
 The king is dead.”の四音節ずつの二句は「構造上韻を踏んで、芸術と人生
 との秩序の間の、皮肉ではあるが調和の取れた完全な置き換えを示唆している」
 (Mo. 259) ということになるのであろう。

七行二連のこの詩は、それぞれ二行目と五行目 (swan/fawn-, cockscomb-

/foam) が押韻する。動物も植物も表現に使われている。

次の三篇は「純粋なものの具体例を提示する」(E. 50)。まず、中央アメリカのセビレトカゲを讃える、四部から成る長篇である。

セビレトカゲ The Plumet Basilisk

(CP. 20-24)

コスタリカにて *In Costa Rica*

燃え立つような流木の中に

緑色がその同じ場所で見え続けている、
ファイアオパールが、とぎれとぎれに、青と緑を示すように。

コスタリカでは 本物の中国トカゲの顔が
見付かるのだ、水陸両棲の降下してくる龍の姿で、生きている花火だ。

彼は跳躍して出逢うのだ 自らの

似姿に流れの中で、すると、王は王と共に
背中を走る三部に分れた羽の衣に援けられて両脚で走る、
尾を曳き摺りながら。空中で気が遠くなる、それから一挑ねして
河床へと飛び込んで、隠れる、黄金の体をした酋長が

グアタヴィア湖^①に隠れたように。

彼は走り、彼は飛び回り、彼は泳いで、自らの
バシリカに到達する——「〈川〉、〈湖〉、〈海〉の支配者は、
眼に見えなかったり見えたりするが」^②、言われた通りにする雲の群と
共にいて——そして「好きな時に長くも短くも、粗暴にも上品にも」なれる。

マレー龍 *The Malay Dragon*^③

我々には我々のがおり、彼らには

彼らのが居る。我々には 外皮羽の冠がある、
彼らのには 腰から外へ広がる黒っぽい黄褐色か青白い翼がある。

我々の は 木から水面へ落ちる、彼らのはこの上なく小さい

龍で 木の頂上から何か乾いたものへと 頭から飛び込む仕方を知っている。

肋骨を拡げて漂いながら

その舟のような身体は落ち着くのだ、
ニクズクの木から飛び出した二枚貝の殻の色合いの小板の上に——微細な
両脚は半ば、くの字に曲げて曳き摺りながら——真物のマレイの
神だ。芳香のない蘭の間で、滋養分のない堅果の

木、〈ミリスティカ

フラグランサ〉の上で、その無害な神は肋骨を拡げるが それは
頭布を持ち上げたりはしない。これは 蛇＝鳩で、東洋に

特有なもの。それは生きているのだ、蝶やコウモリに可能なように
考え込みながら、着生植物がするように自らが掴むものの上に翼をあずけて。

ムカシトカゲ^④ *The Tuatera*

他の所では、ウミイグアナが——

固まり集っているので 踏み込む余地が
ない、尻尾を鰐の格好に十字交差させて横たえながら よちよち
出入りする小鳥たちの間にあって——誰が隣り合っているのか
知らないでいる。鳥＝爬虫類 の社会生活は感じがよい。ムカシトカゲは

ミズナギドリが時にいるのを

大目にみて、卵も十箇か
九箇産む——龍が産んだ数だ、「真物の龍には
九匹の息子がいる」のだから。エリマキトカゲ、脚なしの種類、
そして三本角^{つの}のカメレオンは、逃げようとする真面目ならざる連中だ

もし お前が逃げなければ。

コペンハーゲンでは証券取引所の
主要扉には二対の龍が楽々と屋根に
なっていて——建築家によって曲がりくねらされて——それでその四本の

緑色の尻尾は垂直になろうと共謀しながら、四重の安全を象徴している。

コスタリカにて *In Costa Rica*

現在では、サボジラがその実を

流れに落とす所に居るのは、私が

既に述べたように、世界でも最も素早いトカゲの一種——

セビレトカゲ——で 木の葉や木の実を常食とし
^{かげ}陰を棕櫚の葉、シダ、ペペロミアから受けて暮らす、あるいは横たわって陽を

浴びている、水平な枝の上で

そこからは酸味草や蘭が芽を吹き出す。もしも

襲われると彼は手を放して水面を打ち、その上を走ってゆく——指のある

脚には困難なこと。しかし捕まると——固くなって

幾らか重くなり、掌の上で生き生きと思いのままになる——彼はもはや

あの取るに足らないトカゲではない、それだったら

なっていられるのだが、平たく伸びて後退してゆく

S 状に——小さな、長くて垂直になった蛇のように、あるいはだらりと撓んで

狐の橋[®]になって藪に広がれるのだが。蔓が吊り下げているのだ

絹の上に固着した彼の仄かな陰の重さを。

毛筆を用いたように、八本の緑色の

帯が尻尾の上に

描かれている——ピアノの鍵盤が模様を

白を横切る五本の黒い縞によって付けられているように。この八度音程の

ぞんざいな端正さが その尋常ならざるトカゲを隠してくれるのだ

夕暮まで、それは人間にとっては 表情で人を殺すバシリスクだが、

人間に殺される

トカゲには、歓迎すべき暗さなのだ——追ってくるのが 馬を疾走させる
軍鼓の固執低音、風笛や混棒の

甲音い音なので。空ろなひゅうひゅう鳴る猿の音色はカスタネットを
混乱させる。弓の背で軽く叩く音は 今年の瓢箪の上では奇妙に響くし、

あるいは 彼らが

ケトルドラムに触れる時には——それを聴くと（明りが無いのだから）
脅えた蛙は、小鳥のような金切り声を挙げて、隠れていられた筈の葦の中から
飛び出してくる、隕石の曲線を描いて、

幅広いアメンボの泳ぎで
ぐいと急激に動いて
帝王然たる素晴らしいぎこちなさを表明しながら

そのバシリスクは描くのだ
人間と魚が互いに交換
できるようになりたいという神話の希いを——

素早く上方へ移動してゆきながら、丁度
蜘蛛の驚掴みの指が 堅琴の
低音弦をビーンと弾き鳴らすようだ、そして足取りも
歯切れよいばかりに前進する、
振動する弦の上を後へ退却して
遂にその驚掴みが平たく拡がるまで。

ぴーんと張った針金の中で
微細な雑音が膨れて
変化する、丁度、森の音響増幅されていない七弦琴の中で

そうなるように、木々が鋼鉄の大通りのように立ち並んで覆い隠すので

黒いオパールエメラルドからオパールエメラルドを、とでもいうかのよ
うに——

スウィンバーンが散文の中に呼び寄せた音階、あの
動いたり跳躍したりする時の蛇が

その回りに立てる音なき音楽だ。

それと分らないように

ナイチンゲールが沼沢地で歌うことはない、育ったのは
ヤマアラシの棘状の棕櫚の木々からの

雨のようにパタパタ鳴る音によってだった。これは我らがロンドン塔の
宝物で、スペイン人には見る事が出来なかったもので、羽毛の肩掛けマント

と鷹の頭をした蛾と黒顎の

ハチドリとの間にある。無邪気な、稀な、黄金を
護る龍で、見ているうちに小さな足で立って

焦々した抜き身の剣になり始める、柄の^{つか}廻りで
三重に分れた炎になって 空気を

使い込んでゆく火の中に棲みながら。こうして各々の
逸脱した姿を模写している 燐光を発する

鰐に巣くって、彼は喘ぎ 落ち着く——頭を上げて
苛められている小鳥の眼のような黒い眼で、研ぎ立てられた獐猛な様子で

唯、呼吸をし

手から尻込みしている状態に。

自ら、尚も、未発見の翡翠の斧頭、

銀色ジャガーとコウモリ、紫水晶と磨ぎ上げた鉄、
十トンの鎖[®]に繋いだ黄金と、鳩の卵大の真珠の間に隠れていると思いながら

彼はそこで生きている、

目の醒めるような緑色のものの下の
セビレトカゲの繭の中で。彼の水銀の狂暴さは

鞘の中に落ち込む時のさらさらいう音に和らげられる、
それは、突然、粉々の水挑ねとなって、彼が束の間姿を隠す時の特色となる。

—— *Hound and Horn*, 7. (October–December 1932), 29–34.

[自注] *Basiliscus Americanus* Gray.

① *Guatavita Lake*, 黄金郷 (El Dorado) 〈黄金を塗った者〉の伝説と関連して。至高神の太陽を象徴するものとして、ゴムの粘液を塗り金粉をはいた王は、毎年、筏に乗って家来の貴顕たちに護衛されて、この湖の中心部へ出かけ、湖の女神に貢物を捧げる儀式を行なった。ここで彼は、水中に飛び込むことで黄金の上塗りを洗い落とし、その間、筏の上と岸辺にいる人々は歌を誦しながら捧げ物——エメラルドや金、銀、プラチナ製のもの——を水中に投げ込んだ。A. Hyatt Verrill, *Lost Treasure* [『喪われた宝物』] (Appleton-Century, 1930) 参照。

② Frank Davis, “The Chinese Dragon” *Illustrated London News*, August 23, 1930: 「彼は雨の王であり、川、湖、海の支配者である。一年のうちの六ヶ月間、彼は海底に引き籠り、美しい宮殿に住んでいる。我々は唐王朝を扱った書物から『それは意のままに自らを可視にしたり不可視にしたり出来て、長くも短くも、粗暴にも上品にもなれて、それをしたたか楽しんだ』ことを知る」。龍は「龍として生まれるか(そして真物の龍には九頭の息子がいる)、変容してそうなるのかの、いずれかである」。「西方の丘陵には、ある滝を昇ろうとする鯉がいて、それに成功するものが龍になるのだ」という伝説がある」。

③ W. P. Pycraft, “The Malay Dragon and the ‘Basilisk’” *Illustrated London News*, February 6, 1932. バシリスクは「警戒すると水に落ちてその長い後脚で水面をちょこちょこ走る。…或る同種のもの (Deiropteryx) は、水面を走るだけでなく、底にまで潜って、そこで危険が去るまで、安全にしていられるのである」。

④ *The tuatera or ngarara*. 見かけはトカゲ——亀の特徴を備えている。あばら骨の上に鳥にあるような鉤状突起、そして鰐の諸特徴——それは、ムカシトカゲ目 (the order Rhynchocephalia) の現存する唯一のものである。映画で Captain Stanley Osborne によって示された。Cf. *Animals of New Zealand*, by F.W. Hutton and James Drummond (Christchurch, New Zealand: Whitcomb and Tombs, 1909).

⑤ A fox’s bridge 南米の蔓吊り橋。

⑥ 十トン以上の重量の700フィートの黄金の鎖が、クスコ [ペルー中南部の都市、かつてのインカ帝国の首都] からアタファルペへの身の代金の一部としてもたらされた。彼の殺害の報が護送隊を指揮する人々に届くと、彼らはその鎖を隠すように命令し、それは二度と再び見付からなかった。A. Hyatt Verrill, *Lost Treasure* 参照。

コスタリカは、無論、中米南部のパナマとニカラグアに挟まれた共和国。ファイアオパール (fire-opal) は、“girasol” (火蛋白石) で、半透明の青みがかった白色で、強い光が当たると赤く反射する石。それにしてもムーアは、翡翠(jade)初め、様々な宝石類が好きだったようだ。多くの作品に表現として使われる。

ニクズクノキ (nut-meg tree)：熱帯アジア原産の常緑高木。種子は堅くて芳香があり、香香料や薬用。

ミリスティカ・フラグランス (myristica fragrans)：芳香性ニクズク

着生植物 (air-plant)：=epiphyte, life plant. 他の植物や物の上に固着するが、その植物体から養分は吸い取らず、雨や空気などから摂取する。ラン科植物、地衣類、シダ類、蘚苔類に多い。

ムカシトカゲ (tuatera)：New Zealand 沿岸の諸島に生息する全長約60cmの大型トカゲで主に夜行性。頭項に第三の眼である頭頂眼がある。現存する唯一の喙頭類。

ウミイグアナ (sea lizard)：イグアナ科の大型トカゲ。Galapagos 諸島に生息する。

ミズナギドリ (petrel)：ウミツバメ科や小型のミズナギドリ科の海鳥の総称。“petrel”には「騒ぎをもたらす人」「厄病神」の意がある。

サボジラ (sapota [n])：=sapodilla. チューインガムノキ。熱帯アメリカ産のアカテツ科の常緑樹。樹液からチューインガムの原料の chicle を採る。

ペペロミア (peperomia)：コショウ科サダソウ属のペペロミアの [亜] 熱帯産の常緑多年草または一年草の総称。

酸性草 (sour-grass)：未詳。

バシリスク (Basilisk)：熱帯アメリカ産のイグアナ科バシリスク属のトカゲ。セビレトカゲ。アフリカの砂漠にいて、その息や視線によって人を殺したと言われる伝説上の動物 (トカゲ、龍、蛇の姿をしていたという) も指す。

ケトルドラム (kettledrums)：オーケストラで用いる打楽器。

銀色ジャガー (silver jaguar)：熱帯アメリカ産ネコ科、アメリカヒョウ。

ムーアは実は、年少の頃から、殊の外 basilisk に魅了されていて、この爬虫類は兄との思い出があり、彼女は手紙の署名に “Basilisk” を使っていたことがある程である (Mo. 25)。

動物学上の情報と人間がその動物に与えてきた解釈の種々の例とを同時に提示し、字義通りの事実と想像上の映像との混淆体によって、彼女は、「資源を利用し荒した初期の移民が見い出せなかった、そして後の我々も未だそれと認

定しないアメリカをこの動物が表象していることを、示す示唆と暗示を提供するのである」(E. 50)。コスタリカは、「富んだ海岸」の意で、スペイン人が征服した地であることが、作中で「スペイン人云々」と出てくる所以であること、バシリスクという名称は、ギリシャ語で「動物の王」の意であることが「王は王と共に云々」の理由だとか、「鳥＝爬虫類の社会生活」では、ムーアは、鳥類は爬虫類から派生したという進化論を念頭に置いている等、この作品の詩句に即しながらエンゲルは丁寧に解説してくれている (E. 50-53)。スペイン人が探求しながら見い出せないまま貴重な犠牲となった物に満ちている湖に、この動物が最後に隠れてしまうことによって、作者は、バシリスクが我々にとっては「束の間の喪失」になるにも拘らず「生きて」いることを示すのだ。理解というより搾取が、人間と自然との関係を支配してきた所で、この動物は、時間と自然における精神の代表者として、驚異的な可能性を示し続ける。(E. 53)。「正確な定義、適切な引喩、生彩溢れる感情が、セビレトカゲを〈象徴〉に止めずに、場所の精神の生きた具現物になし得たのである」(E. 53)。

四部全体を通じて、五行連では全て第二，第四行が正確に押韻し，第四部の六行連では第三，第五行が押韻し，中に包まれている行頭の引っ込められている部分は，この動物の動きを示すような趣きを呈しており，各連の最後の二行が若干例外はあるが押韻する。

「素晴らしいぎこちなさ」“excellent awkwardness”とか、「ぞんざいな端正さ」“faulty decorum”などの撞着語 (oxymoron) の効果も忘れられない。

エンゲルの言う，亜熱帯アメリカに見られる「純粋なもの」のもう一例が，次の作品ということになる。人間の有するありふれた価値観や，誤って自然を空想化する性癖に関わりなく知覚し行動できるものとして，「軍艦ペリカン」の名をもつカリブ海の鳥を讃美した (E. 53) のである。

軍艦ペリカン The Frigate Pelican

(CP. 25-26)

素早く飛行しながら あるいは大気に乗りながら 軽薄さを
力強さと結び付けるラセラスの友人の
翼の計画を諒解する鳥がいる。この
オビハシカイツブリ，グンカンドリ，ハリケーン
ドリ。もしも敏速なというのが彼に相応しい
語でないなら，彼が波すれすれに飛ぶ時の

嵐の前触れも 魚を捕っているのだと
見えることだろう、尤も もっとしばしば
彼が好んでいると見受けられるのは

飛行中に、勤勉な 翼の未発達な種属から
彼らが捕えた魚を失敬することだし、それも為損じることはめったにない。
優雅の驚異だ、どれ程早く彼の
犠牲者が飛んでも、どれ程しばしば
回転しても。他の連中は同じように易々と
ゆっくりもう一度上昇しながら
その円周の頂点へと
動いて行って止まり

そして逆流して 自分たちの方向を風が逆向きにするがままにする——
木樵りの子供二人を家へ運べる
もっと頑丈な白鳥とは違って。好機を逃がすな、店を
維持せよ、私は羊を一頭所有している、というのは それ程
柔軟ではない動物の座右銘なのだ。この動物は
我が子の、白鳥の幼い綿毛服が
留まっていられるように細い木切れを見つけ出し
ヘンゼルとグレーテルを区別しようとはしない。
熱情溢れるヘンデルが——

弁護士になって雄々しくドイツ国内で成功を収める
運命だったのだが——内緒でハーブシコードを習得して
恋に陥ったことを決して気付かれることがなかったように、
この信じ易くないゲンカンドリは 隠れるのだ
高みに、そして自らの技術を壮大に
ひけらかすことで。彼は滑空する、
百フィートを、あるいはぶるぶる震える、
焦げた紙の振舞いのように——見せ掛けに
充ちているのだ、すると警戒中の

驚だ…… ^{フェステイナ・レンテ}〈急がば回れ〉だ。礼儀正しく陽気で
 あれ？ どうすればそうなる？「もしも巧くゆけば私は祝福される、
 誰が私を祝福するにしろしないにしろ、そしてもしも巧く
 ゆかなければ私は呪咀される」^①。私たちは月が
 サスケハナ川の上に昇るのを見詰める。自分なりに
 この限りなく夢みがちな鳥は飛んでゆく
 それにしては凡俗な所へ、マングロウプの
 湿原へ眠りに。彼は月を浪費する。
 しかし彼は、そして他の連中も、やがて

木の太枝から身を起こして、飛翔しながらも疲れて危険になった
 瞬間を撥ね付けることが出来るのだ、心臓と肺に
 崩れて粉々になるピュトンの重さを押しつける瞬間を。

—— *Criterion*, 12 (July 1934), 557-60.

[自注] *Fregata aquila*. オーデュボンの軍艦鳥。[John James Audubon (1785-1851). 米国の鳥類学者で画家。代表作に *The Birds of America* (1827-38)。彼の名に因んで1905年米国に設立された野生生物、特に野鳥保護を目的とした協会が Audubon Society.]

巨大な飼い馴らされたアルマジロ。New York の W. Stephen Thomas による写真と説明。

紅斑蘭 (Red-spotted orchids), Pizarro に殺戮された土着民の、おそらく、血。

① 引用文はヒンズーの格言。

ラセラス (Rasselas) : Dr. Johnson の教訓風物語 *The History of Prince of Abyssinia* (1759) の主人公。アビシニアの王子。その友人とは、平穏な「幸福の谷」の生活からエジプトへ出奔するの同道した師の老哲学者 Imlac を指すか。

サスケハナ川 (the Susquehanna) : New York 州中部から南流して Pennsylvania 州東部と Maryland 州北東部を通過して Chesapeake 湾に注ぐ全長715 kmの川。英国の詩人・批評家・哲学者 S. T. Coleridge (1772-1834) が、友人の R. Southey と共に同志を募って、共産主義を理想とするユートピアの理

想郷“Pantisocracy”（一切平等団）を、1794年に建設しようとしたのが（挫折に終わったが）この川の流域だった。

ピュトン（Python）：ギリシャ神話。Delphi にいた大蛇で、Apollo に退治された。彼はこの場所に神託所を開いた。

幾通りもの名を持つこの鳥の生態を具体的に活写するのも、この詩人の手法であり、白鳥のお伽噺と対比するのも、彼女の面目である。ヘンゼルから音の連想でヘンデルを持ち出すことも、この音楽家のある挿話を譬喩に使うことも。「礼儀正しく陽気であれ」というイタリアの標語（E. 54）とヒンズーの格言の対比の巧妙さ、「それ程柔軟でない動物」の人間（E. 54）とこの鳥とをやはり並列させて、そこから発する火花を読者に感取させる。

一行目と五行目、四行目と六行目、及び八行目と九行目がそれぞれ押韻する九行の四連と、一行目と五行目及び七行目と八行目とが押韻する八行の一連に、最後に三行連で締め括る計47行の作品である。作品最後の一行は、第一連の最後の二行と押韻する。

1934年の三月中旬、ムーアは「野生の荷」“Wild Cargo”と題された博物史の映画に触発されて次の作品を書く。“albino”と“buffalo”との押韻に気付かされて喜んだ（Mo. 264）。この作品は、更に次の「九箇のネクタリン」（これも或る絵によって刺戟を受けて書いた作品）と共に、“Imperial Ox, Imperial Dish”『帝王の雄牛、帝王の食品』なる題で同時に発表された。

バッファロウ The Buffalo

（CP. 27-28）

紋章記述で黒が意味するのは

思慮深さ。そして ニゲル革は、縁起が良くない、だ。もしかすると
ヘマタイト
赤鉄鋼の――

黒い、緊密に内側に湾曲したバイソンの角には

意味があるのだろうか？ ライオンの

尾のようなものの上の

煤煙褐色の尾の

房。それは何を表わしているのだろうか？

そして草を引き抜くジョン・スチュアート・カリーの描く
アイアスは――鼻輪は

していない——鳥が二羽 背に止っているのは？

・・・・・・・・・・・・・・・・

現代の

雄牛は あのアウグスブルク雄牛の
肖像画には似ていない。その通りで、
あの偉大な絶滅した野牛オーロックスは 絵に描かれる
獣だった。縞があり 六
フィートの角を抜けて——徐々に縮小して
いってシャムネコの

ブラウンスウィスの大きさ、もしくは犂牛の
姿となって、白いフラシ天の喉袋と温血の
背の瘤を持つものに。赤い
皮膚のヘレフォード種や 白黒ぶちのホルスタイン種になった。それでも
人によっては言うだろう 体毛の薄い
バッファロウは最もよく
人間の気持に適ったのだと——

象とは違って、
彼の身に着けている体毛の中には
宝石と宝石細工人が共にいるが——
軛で相棒と一組に繋がれて 雪の中を
カエデの樹液を膝まで
持ち上げて運ぶ白鼻のヴァーモント牛
ではなくて ロウランドソンに

風変りに描かれた〈過重労働雄牛〉
ではなくて、インディアンのバッファロウなのだ、
白子の
足をして、成すべき一日の仕事を持って
泥沼湖の中に立っている。白人の

キリスト教徒の不信心者が 仏陀に待ち
伏せられているのではない、彼らでは

彼に、バッファロウ程にも
十分に奉仕するわけにはいかない——まるで手綱留めされたみたいに
血気盛んで——自由になる首を
差し伸ばしながら、蛇の尾を半ばねじって
脇腹にくっつけて。また 陽気に
手助けするようなこともしない、
あの〈賢者〉が 両足を

同じ側に出して坐ったまま
聖堂に来て降りるのを。また 如何なる
象牙質の
牙もない。あの、虎が咳すると
荒々しく身を屈めて
毛皮を無害な屑に変える
二本の角のような牙は。

そのインディアン・のバッファロウは
素脚の牧夫たちに
住み処の干し草小屋へと
導かれながら 何ら比較を恐れる要はない、
バイソンとの、あの一組の牛との、
全くのところ 如何なる雄牛の
先祖との、比較も。

—— *Poetry*, 45 (November 1934), 61-4.

カーリー (John Stuart Curry, 1897-1946) は英国の画家で、この詩の書かれた当時現存で活躍していた。

アイアス (Ajax) : トロイ戦争でのギリシャ軍の英雄。アキレスを救ったがその鎧をオデッセウスと争って失敗し、自殺した。ここは牛を想起させるという譬喩か。

アウグスブルク (Augsburg) : ドイツ Bavaria 州南部の都市。

オーロックス (Aurochs) : 原牛。欧州産の大型野牛。1627年以降絶滅した。Urus ともいう。ムーアは、絶滅した動物に殊の外、痛恨の思いをその多くの作品で示す。⁽²⁾

ブラウンスウィス (Brown Swiss) : スイス産の褐色の乳牛の一種。

^{ホウ}犁牛 (zebu) : コブウシ。インド原産。東南アジア、北アフリカなどで飼育されている家畜化した牛。

フラシ天 (plush) : ビロードの一種で表面に 3 mm 以上の毛羽がある。

ヘレフォード (Hereford) : England の地名から。英国種の食用牛。

ホルスタイン (Holstein) : ドイツ北部地方の名から。元来、北オランダや Friesland で飼育された脂肪分の少ない乳を多く出す黒と白とのまだらの乳牛。

バッフォロウ (buffalo) : ウシ科の大型野牛数種の総称。バイソン (bison) もアメリカ野牛、北米産の牛に似た反芻動物、buffalo ともいう。

ロウランドソン (Thomas Rowlandson, 1756-1827) : 英国の諷刺・挿絵画家。

牛の進化に思いを馳せながら、バッファロウが、気性の激しい、「自由な」、陽気な、それでいて虎をも闘いで退けられる動物であると讃えた (E. 55) のである。

各七行は共に、第二、第三行と第四、第六行が押韻し、最終連は第二、第三行と第六、第七行が押韻する。一箇の四行連 (実は、初出では他の連同様の七行連だったものを後半の三行から次の連へかけて削除したもので、全て同じ押韻構成だった。「尤もこのような印刷では/黒い鳥なのかも/背中の色も分から//ないが」が削除された。) は、第二、第三行が押韻する。

次の「九箇のネクタリン」は、様々な現実を提示することに興味を示す客観主義詩人が、現実的なものよりも想像裡のものに優位を見い出しているような (E. 55) 詩である。

九箇のネクタリン Nine Nectarines

(CP. 29-30)

桃がそうであるように 二箇ずつ配列されると
全てが生きられるような間隔で――

八箇と一箇だけとなって、前の年に

育った小枝の上で——それらは
派生物のようにみえる。

普通でないわけではないが
その真反対が見られるものもある——
一箇のネクタリンの上の九箇の桃。
緑か青か あるいはその両方の
細っそりした三ヵ月形の葉には一面に
和毛がなくて、中国風に、その四

組の半月の葉のモザイクは
太陽に向かって暗褐色のアメリカンビューティの桃色を
撒き散らした淡紅色になってゆく、
その色は商業装丁の
探求心のない一刷毛
によって蜜蝋の灰色に加えられたものだ。
〈玉〉桃という、その頬の
赤い桃は死者を助けることは叶わないが
時宜に適って食されれば死を妨げるのだが、それと同様に
イタリアの
桃の木の実、ベルシャスモモ、イスファハーンの

隔離壁の中で育成されたネクタリンは
野生の自然の果実として
中国で最初に発見されたのだ。だが それは野生だったのだろうか？
プルダン・ド・キャンドルは言おうとしない。
人は何らの欠陥も感じないのだ
こういう象徴的な一群の
九箇には。葉の窓は
シギゾウムシによって刺し子に縫い合わされていないが
この虫を誰かがある時描いたのだ
この甚だ修繕された図板の上に
あるいは同じ様に正確な

枝角なしのヘラジカの中か、アイスランド馬の中か
 あるいはロバの中に、それは灌木の
 褐色じみた花の色の 古くどっしりとして
 低く傾いているネクタリンにもたれて
 眠っている。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ある中国人には「分かるのである、
 荒野の精神が」
 そして見かけが小馬の
 ネクタリン愛好の麒麟が^①——長い
 尾の、あるいは尾のない
 小型の肉桂の褐色の、普通の
 駱駝の毛をした一角獣で
 羚羊の足をして角がないが、
 ここでは磁器の上に琺瑯引きが施されている。
 この傑作を想像したのは
 中国人だった。

—— *Poetry*, 45 (November 1934), 64-7.

[自注]「中国人は、片側が非常に赤い楕円形の桃は長寿の象徴だと信じている。……『神農経』* の言葉によれば、〈玉〉Yu という桃は、死を妨げるという。もしもそれを丁度よい時に食べなくとも、それは少なくとも亡骸が世の終りまで、腐敗しないように保持するのである」。Alphose de Candolle, *Origin of Cultivated Plants* [『栽培植物の起源』] (Appleton, 1886). [この“Chin-noug-king”* は恐らく“Shen-nong-king”の誤り。king は普通話(標準語)の拼音^{ピンイン}の綴り方ではjing となるが、方言ではking も考えられる。宋代に編まれた類書(百科辞典風の中国独特の書物)『太平御覧』に次のようにある。「神農経曰玉桃服之長生不死若不得早服之臨死日服之其尸畢天地不朽」——向嶋成美教授]

「褐色の嘴と頬」1928年の Karl Freund 収集物売り立てへの Anderson 目録 2301.

New York Sun, July 2, 1932, *The World To-day* [『今日の世界』], 中国, 蘇州より Edgar Snow 著。「私がこの国に初めて来た時会った中国のある老紳士は、私のために、彼の所謂〈六つの確実なもの〉の名を進んで挙げてくれた。彼は言ったものだ、『確かだと分るでしょうが、最も透き通った翡翠は莎車から、最も綺麗な花は四川から、最も繊細な磁器は景德鎮から、最も美味な茶は福建から、最も純粋な絹は杭州から、そして最も美しい女性は蘇州から来るのです』と」。

① Kylin (あるいは中国の一角獣)。Frank Davis, *Illustrated London News*, March 7, 1931「それは雄鹿の体、一本の角、雌牛の尾、馬の蹄、黄色い腹部、そして五色の体毛を持っている」。

アメリカン・ビューティー (American-Beauty) : 花が大きくて深紅色の米国産バラの一品種。

イスファハーン (Ispahan) : イラン中部の都市。16-18世紀にはサファビー朝ペルシャの首都だった。

ブルダン (Prudent) は、「慎重な、賢明な、抜け目のない」等の意味の英語の形容詞(ブルーデント)を、フランス語の固有名詞のように使用した、ムーアのユーモアか。自分が知りたいことを教えてくれない著者への些かの皮肉とも見えよう。

シギゾウムシ (curculio) : シギゾウムシ属の甲虫の総称で、プラム、サランボウなどの害虫。

肉桂 (cinnamon) : クスノキ科クスノキ属の高木。根、茎の皮に芳香があり、薬用にする。中国南部、ヴェトナム原産。

この詩は、元来、「九箇のネクタリンと別の磁器」という “and Other Porcelain” の付加された標題であった。書物に載っていた、中国の装飾された皿の粗末な複製と良質の琺瑯引き磁器の一角獣の絵とを対比したもので、その皿は小枝にネクタリンが実っている絵で装飾されていた (E. 55)。粗悪な本の絵を観察しながら語り手は思いを凝らしている。第四連の後の点線は、省略部分の存在を示すもので、現に最初発表したものからは、後半部が削除された。ここでは、皿の装飾絵を入念に描写して、西欧の食器類に見られる狩猟や家庭の場面のかかなり濃密な写実ぶりと、想像上の主題を扱う中国人装飾画家の抑制の完璧さが対比されていた。この素材は、詩の動きを促進させるものではないが、とエンゲルは、この省略を肯いながらも、眼が「顔から——唯の/微妙に描か

れた灰色の円盤から/空間の中でそれ自体から外へ、分離している」月光の中の蝙蝠を描写した詩行のような美事な箇所が失われたことを愛惜している (E. 55-56)。桃と類縁のある果実と、男女を具現化した神話上の動物とは、共に統合を象徴するものとして、ムーアには格別に訴えかけたのであり、彼女は「荒野の精神が分かる」中国人の想像力を讃えたのである (E. 58)。

同時に発表された「バッファロウ」とこの作品とで、ムーアは、「物質と精神との統合を象徴しうのような主題を求」めた (E. 56) のであった。

この詩は、後半が省略された第四連以外の四連は各々11行の作品で、各連共、第二、第五行、第七、第八行、第十、第十一行が、それぞれ押韻する。

以上の七篇は、1932年の10月から1934年の11月までの略二年間に公表された作品である。

次は、初出が1916年の作品で知的な抑制 (E. 56) を称揚し、芸術家は如何に歩むべきかが主題の作品 (E. 58) とも見られる。ムーアに珍しくない、標題が本文の一行目になる詩である。エンゲルの見るように、この競争の激しい明かに努力の必要な時代には、芸術上の無頓着、さり気なさが詩人にとっては最上の態度だと奨揚したもの (E. 58) ということになるうか。

この辛い試練の時代には無頓着は結構なことだし

In This Age of Hard Trying, Nonchalance Is Good and (CP. 34)

「実際、粘土の壺を

焼くのは神々の仕事ではない」^①。彼らはこの場合

そうしなかった。若干のものが

自らの価値軸の上で回転した、

まるで過度の人気は 壺でもあるかのように。

彼らは敢えて行わなかった

謙遜の表明は。その研き上げられた楔は

大空を引き裂いたかも知れないのに

黙っていた。遂にそれは無駄になって

衰れにも或る愚か者に与えられて 特権を投げ出した。

「五百年の会話の

長さによって、他の全ての人々よりも
 背丈が高くなった」人がいたが、彼の
 現実には決してありそうもないことについての話は——
 魔女の行なうような無愛想な確信に充ちたゆったりした話しぶりよりは

ましだった。彼の脇

演戲は その効果の点で 激烈極まる

正面攻撃よりも恐いものだった。

棒，袋，矛盾を装った態度は

あの武器，即ち，自己防衛を，最も美事に前以って準備する。

—— *The Chimaera*, I, No. 2 (July 1916), 56.

〔自注〕① 引用文は，Turgenev, *Fathers and Sons*. [父親たちと息子たちの新旧両世代の思想・生き方の対立を，農奴解放令発布を直前にした激烈な過渡期ロシアの社会を背景に描いたツルゲーネフの代表作『父と子』（1862）の第19（章）での，バザーロフの科白に出てくる。日頃の思想・言動に反する求愛を断られたバザーロフを，彼の崇拜者のアルカージィが慰めて原因を推測するのに対する答の中で。ロシアのこの時代とムーアの生きている第一次世界大戦中の「現代」が対比される。]

作中の「彼ら」とは神々であり，後半の「彼」とは「或る愚か者」のことであろう。「脇演戲」(by-play)とは「確信に充ちた」ゆったりと引き伸ばす語り，つまり社会の慣習とでもいうものか。「棒」(staff)は打ってかかる直接の，「袋」(bag)は包み込んで力を封ずる間接の，共に攻撃手段を指す暗喩。「壺」(pot)は価値のないものを表わす譬喩。「楔」(wedge)は，登山の際などに割れ目に打ち込むもので，新たな芸術の世界を開く手法などの，やはり暗喩である。

五行ずつの四連から成る詩で，各連共，二行目と五行目が綺麗に押韻する。しかもその韻を踏む語が，心なしか作品の主題を暗示さえするようにみえる。not-pot, wedge-privilege, all-drawl, effectiveness-protectiveness,で，壺になるな，楔を特権に，全てを引き伸ばして，効果ある防禦を，の如く。

これから略一年後に，ある詩華集に収録されたムーアの六篇のうちの一作が，“My Apish Cousins”（『我が猿の従兄弟たち』）と当初題された次の詩である。

猿たち The Monkeys

(CP. 40)

は、大いに^{まばた}瞬きして蛇を恐れた。縞馬たち、彼らの
 異常さこの上なく。象たちは 霧の色をした肌をして
 実用一点ばりの付属肢を持って
 そこにいた。小さな猫たち、そしてインコが——
 よく調べてみると つまらぬありふれたことながら破壊していたのだ、
 自分には食べられない食物の部分や粗皮を次々に。

私は彼らの壮嚴さを思い出す、今ではもうそれは壮嚴
 というよりはぼんやり薄れたものになっているが。思い出すのは困難だ、
 二十年前にささやかに知り合えたものとも呼べそうなものの
 装飾、話しぶり、正確な
 態度などを。しかし私は彼を忘れることはないだろう——あの毛深い
 食肉獣の間にいたギルガメシュを——あの猫を、それは

楔型のスレートグレイの印を前脚と果敢な尾につけて
 辛辣に批評したのだった、「彼らは私たちに青ざめた
 巢立ち半ばの抗議を押しつけたのだ、ぶるぶる震えながら
 不明瞭に激昂して、言ったものだ
 芸術を理解するのは我々の任ではないと。それは全て
 甚だ困難だと分り、その物を吟味するのだ

まるでそれが信じられない程に秘伝めているみたいだと、まるで
 それが、緑玉髓が大理石から切り出されたものででもあるみたいに均整が
 取れて寒々しいと——張りつめて厳しく
 我々に及ぼす力が有害で、ライ麦、亜麻、
 馬、プラチナ、木材、そして毛皮の代りに
 追従を差し出す時の海より深いと」。

—— *Others: Anthology of New Verse*, ed., Alfred Kreymborg (New
 York: Alfred A. Knopf, 1917), 76.

ギルガメシュ (Gilgamesh): バビロニア伝説の王。ホメロスよりも古い紀

元前2,000年頃の叙事詩 *Gilgamesh Epic* の主人公。三分の二が神で、残りが人間だったという。

スレートグレイ (slate-gray)：明るい黄緑色の混入した灰色。

緑玉髓 (chrysoprase)：玉髓＝潜晶質石英 (chalcedony) の一種で宝石。ムーアはとにかく宝石好きである。

この詩は、一読よく「分かる」詩だろう。尤も、彼女の詩としては、である。相変らず譬喩を、それも多くの動物を、縦横に駆使して華麗なイメージを展開する作品で、批評家と批評そのものを論じた詩である。自分が咀嚼できない作品を「破壊」する評者は、世に絶えることがない。

芸術家は、対象の中に精神を見い出さなければならないが、その営為は「秘伝」めいたものになっては不可だ、という思想である。「追従」が芸術を破壊するのは無論である。

六行四連の詩で、どの連も第四、第六行が、そして、初めの三連、第一、第二行も押韻する。

以下四篇は、1922～23年の一年半程の間に発表された詩である。

人々の環境 People's Surroundings

(CP. 55-57)

彼らは人の質問に答える、
縦材のテーブルには壁が押し迫っていて。
この、配置の整った乾いた骨の中には
人の「自然の敏速さ」^①が圧縮されており、込み合っているのではない。
人の流儀は そのような単一性の中で見失われたりするものではない。

宮殿の家具は、甚だ流行遅れで、甚だ古い流行もの。
セーヴル磁器にして暖炉の犬たち——
バグ同様廃れた、尖った耳の青銅製ドロミオ。
人は粗悪な家具に関しては自らの好みがあり、
これは人の選んだものではない。

混合柱式のヨーマン＝エルベ分離式設備の
広大な壊せない共同墓地。

鋼鉄、桎の木、ガラス、貧しいリチャードの出版物
それには有効な公けの極意が掲載されているが
用紙が非常に薄くて「1,420頁で一インチになる」^②ののだが
それが叫んでいる、言わば、あなたが私の時間を奪う時、あなたは私が使うつ
もりだったものを奪うのだ、と。

二十フィートの深さのシャクナゲの中に樅の木々に隠された本街道、
雄孔雀、手製の鍛造門扉、古いペルシャビロード^③、
象牙色の地の上に薄い黒で輪郭もくっきりと描かれた薔薇、
西洋杉の 刺し貫かれた鉄の影、
中国の彫刻されたガラス、古いウォーターフォード製品、教養高い婦人連、
永遠へと燃り合わせられた庭園造り。

ユタ州やテキサス州に見られる広大な距離に及ぶ直線、
そこでは人々は言われなくてもすむ、
性能の良いブレーキは優れたモーターと同じように重要だなどとは、
そこでは 皮膚の特別の感覚細胞のお陰で
彼らは、鱒のように、やって来るものを嗅ぎ取れる——
あの、常識という明白な感覚器官を持った冷静な人々は
鳥が飛んでゆく時のように、二点間の正確な距離を知っているのだ、
一直線に動いてゆく精神には 何かしら魅力がある——
蚊と戦争する都会のコウモリの罟^④、
アメリカ弦楽四重奏団。
これらは答を越えている質問であり、

そして珊瑚礁の上の〈青鬚の塔〉^⑤であり、
羅針盤の全方位を閉ざしている魔法のネズミ装置は
石化した波のように入り江の途方もない紺碧を上から覆っている。
そこには埃はなく、生命はレモンの葉のようで、
一枚の緑色の丈夫な半透明の羊皮紙で
そこでは鳳凰木の緋色、銅色及び鮮紅色の中国朱が
石造建築に火をつけ、碧青色が時計を反駁する、
歓待という奇妙な観念を備えた地下牢は

その「月長石から彫り出された幾つものチェスの駒」^⑥、
 そのマネシツグミ、房飾り付き百合、それにハイビスカス、
 その、趨に青い半円周の付いた黒蝶、
 オニツクス
 漆黒の耳を持つ黄褐色の山羊、きらきら輝く厚みのないトカゲ、
 格子細工の穴開きトルコ石の上の火と銀の飛沫のように
 そして手に触れられて震えているアカシアのような婦人は
 蘭と蘭との小さな衝突の中に迷い込んで——
 色に染った水銀は落とされて姿を
 消す、藤色と紫水晶色の五十通りの色合を見せる従順なカメレオンのように。
 ここで、こういう確立の精神が、人は自分自身について余りにも思いを多く
 巡らせることは不可能だろうという結論に、達してしまうと
 洗練が「エスカレーターのように」「進歩の神経を切断して」^⑦しまうのだ。

見かけのこういう当り障りのない、個人に関わって個人に関わらない表現に
 眼は、飛び越すべきものを悟るのだ、
 行為の人相は 骨格を明かしてはならない。

「環境は、そのものになる様子を示してはならない」のではあるが
 それに対するエックス線のような探求の強度を備えながら表面は後退する、
 表現の、干渉する房べりは 突出するものの上に付いた染みにすぎない、
 それへの上昇もなければ下降もない、

我々は外部の構造と根本的な構造を、見る——

軍隊の指揮官^⑧、料理人、大工、
 刃物屋 賭博師、外科医に武具師、
 宝石細工人、絹糸扱い人、手袋製造人、ヴァイオリン弾きに 民謡歌手、
 教会守り、黒布染物師、馬丁に 煙突掃除夫、
 女王、伯爵婦人、貴婦人、皇帝、旅人に 船乗り、
 公爵、王子に紳士、

彼らは各自各々の場所に——

幕営地、加熱炉、戦場、
 集会、祈祷室に 衣装部屋、
 巢窟、砂漠、鉄道の駅、収容所に エンジン製造所、
 商店、牢獄、レンガ工場に 教会の祭壇——
 清潔で品の良い壮麗な場所に

城、宮殿、大食堂、劇場に 皇帝の謁見室に。

— *The Dial*, 72 (June 1922), 588-90.

[自注] ① “Natural promptness”. Thomas Humphy Ward, ed., *English Poets*. Webbe——「機智に富んだ紳士で、最近物故した作詩者の中の主要人物。機智と自然の敏速さの天賦の才が、彼には豊富に現われている」。

② 広告。 *New York Times*, June 13, 1921. 「用紙——人間のように長く、髪のように薄く。Lindenmeyr 系列の一つが *The Literary Digest* と *The Standard Dictionary* の出版社である Funk and Wagnalls 社によって、同社のインディアペーパーの12ページの小冊子用に使われた。インディアペーパーは極度に薄いので、扱い難い45×65インチの大きさだということが話題になると、その色々な結果について多くの人々の心配が増してきた。どの工場もインディアペーパーでそのような大型の紙を作ったことがなかったし、どの印刷所もそれを扱ったことがなかった。しかし S. D. Warren 社がその紙を製造し、Charles Francis 印刷社がそれを印刷した——二色刷りで正確な出来栄えにそれを印刷したのである。Warren のインディア紙は甚だ薄くて、1,420ページが1インチの厚さにしかない」。

③ *Persian velvet*, ベルシャ王宮後援で、1919年12月、ニューヨーク市の Bush Terminal Building でのベルシャ物産展の16世紀の見本、「その意匠は、薄い褐色の象牙色の野原に置かれた真珠白色と淡黒色の輪郭で描かれた一固りの薔薇の繁みから成り立っているので、製品全体が豹の斑点群に似てみえる」。

④ Texas 州 San Antonio で、蚊と戦うために。

⑤ ヴァージン諸島の St. Thomas にある青鬚の石灰石の塔。

⑥ Anatole France.

⑦ 「エスカレーターが進歩の神経を切断するように」。J. W. Darr 神父。

⑧ 「ここからの六行」 Raphael : *Horary Astrology*. [『日時占星術』]

セーヴル (Sèvre) : パリ南西郊の町、陶器で知られる。

バグ (pug) : 顔が平たく鼻が低いブルドッグに似た小型の愛玩犬。

ドロミオ (dromio) : スペイン語の “dromeo” は “emu” (エミュー : オーストラリアのダチョウに似た鳥)。これか？

ヨーマン＝エルベ (Yawman-Erbe) : 工案者の名前か？未詳。

貧しいリチャード (Poor Richard) : Benjamin Franklin が Philadelphia で1732-57年に発行していた暦が、*Poor Richard's Almanack* で、有益な情報や格言を盛り込んで大好評を博した。

ウォーターフォード (Waterford) : アイルランド南部のガラス工場で有名な町。

鳳凰木 (poinciana) : Madagascar 原産のマメ科の高木。明るい緋色かオレンジ色の総状花をつけ、平たい木質の莢は60cmにもなる。

最終連の冒頭で述べられるように、人々は晒してしまいたくない動機に技巧を弄した表面を被せようとする行動を発達させるが、実は見かけは隠すことにはならず、却って人の本性へ導く働きをするのだという逆説を探求するのがこの詩 (E. 69) ということか。ムーアの一連の、地理と文化との関係を考察する詩の一篇 (Mo. 263)、でもある。

人間の種々様々な職業、役割と、それが曲型的に果たされる場所とを、六行ずつびっしり並べてみせるこういう「ホイットマン流」の (S. 15, 38) 目録、表の一覧手法は、「猿たち」の最終行にも既に見られた。読者の連想と思索を拡げ、作品そのものを深遠に、悪くすれば曖昧にし混乱させるという長短を持つ技法である。この作品は、長所に留めておける限界の実験ともみえる。夥しい引用、出所の注 (注はもはや重要な本文そのものでもある) と共に、作者自身の感性、関心の在り処をよく示すものである。大部な書物の出版を可能にする極薄紙の製作技術に対する賞讃などムーアの面目躍如たるものがある。「一直線に動いてゆく精神には 何かしら魅力がある」にしても、「エスカレーター」のようなのは「進歩の神経を切断」したことになるというのは、この語り手は、飛躍と、自分自身について思いを十分巡らせ続けられるような「確立の精神」「洗練」を希っているのだろう。環境に対する人間の在り方が思索された作品である。物の外観・その周りの正確な観察が、その物自体の内部と本質を洞察する道だと、この詩作品そのものが示していよう。

全篇七連 (順に、5, 5, 6, 6, 11, 20, 21行) から成り、長い詩行が多く、押韻は別にない。

次のは、この五ヶ月程前に公表された作品で、既に標題に動物が溢れている。

蛇，マンガース，蛇使い，その他

Snakes, Mongooses, Snake-charmers, and the Like (CP. 58)

私には友人が一人いるが 彼なら値を付けるだろう あの長い指の全てに付け
根から先まで——

あの恐ろしい鳥の鉤爪に、あの異国のエジプトコブラとマンガースに——

何から何まで仕事が辛い国の、草集め人の、

松明運びの、犬の世話人の、伝言運びの、聖者の国の、産物に。

捕獲された日と殆ど同じように荒々しく獰猛なこの際立った虫に心奪われて

彼は、分析の目的では如何なるものも見詰められないかのように凝視する。

「草の中を素早く波のようにさざめいてゆく細っそりした蛇、

まだらの背をした悠々たる亀、

小枝から石へ、石から藁へと通り過ぎてゆくカメレオン」^①が

一時は彼の想像力を照らした。彼の讃嘆は今これに集中する、

がっしりしていて重くはなく、それは旅行用の籠から立ち上る、

本質的にはギリシャ人のもので、鼻から尾まですっかり可塑性の動物として。

人はそれをアルプス山脈の影を見るように見詰めざるを得ない、

その襞の中に 琥珀の中の化石蠅のようにスケートリンクの旋律を閉じ込めて
いるのだ。

最も古い時期から 重要さが張り付いてきたこの動物、

それを崇拜する人々が述べてきた通り、美事なのだ——何のためにそれは創り
出されたのか？

純粋な形の知性が 生産力のない一連の思考に

着手してしまうと、それは後戻りしないのだということを示すために？

我々には分らない。それに関して確かなことは唯一つ、その姿形である。でも

何故 抗議するのか？

人々を矯正しようとする情熱は、それ自体、人に苦痛を与える病気なのだ。

褒められない嫌悪が 最善である。

——Broom, I (January 1922), 193.

[自注] ① George Adam Smith, *Expositor's Bible* [『解説者の聖書』] (1890)

「エジプトコブラ」と拙訳したのは“asp”で、Cleopatra が自殺に用いたの

もこれと伝えられる。南欧西部に生息するクサリヘビ科の小型毒蛇アスプレクサリヘビもある。

この作品、最後の二行が眼目であろう。「自分に理解の及ばない人々や状況を正そうとするのは、誇りから生ずることが多い。最善の方策は、自然である故に高慢ではない「嫌悪」を自由に表明するのを容認することである。ここでの嫌悪は、女性と蛇との間に主が定めたのだと「創世記」が伝える敵意ゆえ、当然の反応だと考えられよう」(E. 71)。

木球競技 Bowls

(CP. 59)

を 芝生の上で

ゆ そうぼく
癒瘡木の球と象牙の標識で

標的柱をマガモの陣形に据え付けて

そして素早く分散して――

この古代の儀式張りの存続によって

漆彫りのやり方で

露出された層の上に層がと確かな筆触と急ぐことなき切り込みが重ねられて

その結果甚だ多くの色が、絵画に必要なように、明らかにされるだろうから

私には分るのだ、我々は几帳面な人々なのであって

活動中に阻止されたボムペイの市民ではないのだと

文通の代表的な一面ならそう仄めかしそうだ。

マチルダの時代以来、言われてきたあらゆる事柄に

無作法にも関心を示さない方策を放棄して

私は現代英語の語源辞書を買うことにしよう

何が書かれているか理解できるように、

そして蟻と蜘蛛のように

時々本部へ戻って

問いに答えよう

「何故、私は夏を好むよりも冬の方を好むのだろうか？」に。

そして認めよう、劇作家と詩人と小説家の顔をまともに

見ても 私は気分が悪くならないことを――

私は同じように感じるのだと。

そして私は あの雑誌の発行元に手紙を書こう

それは「毎月 最初の日に現われて
 人がそれを買う時間の余裕がないうちに姿を消すだろう、
 もしも人が、適切な事前対策を講じないなら」と。
 そして喜ばせる努力をしよう——
 素早く与える者は二度与えるのだから
 他の何にもまして 手紙でなら。

—— *Secession*, 5 (July 1923), 12.

木球競技とは、芝生で木の球をジャック (Jack) という目標のボールの出来るだけ近くに転がす競技。癒瘡木 (lignum vitae) : 字義は「生命の木」。ハマビシ科の常緑高木。滑車台、木槌の頭、軸受けなどに使う他にもグアヤク (ユソウボクの別称) 脂を採る。

ポムペイ (Pompeii) : イタリア南西部、ナポリ湾に臨む古代都市。79年の Vesuvius 火山の噴火によって埋没したが、現在では市街の約八割が発掘されている。

マチルダ (Matilda) : 神聖ローマ帝国の女帝 (1114-25) で英国の女王 (1141) だった英国の Henry I の娘 (1102-67) を指すか。

この作品、難解だが、木球競技の様子の描写と漆彫りの入念な技法との対比から始まって結局、手紙を書くことについての思索になるのだろうか。質問者とそれに応答する者との関わりも話柄である。エンゲルは、次の作品「新参者たち」と共に、書き手の型に対する諷刺で、外観と現実との関係を扱っていると看做している (E. 71)。

新参者たち Novices

(CP. 60-61)

は 自らの作品を分析する

ウィル・ハニカムが或る公爵夫人に棄てられた意味で。

脅えた自我の些かの尊大さが問題点を混乱させるので

彼らには分らないのだ、「金銭を与えるのは買い手なのか売り手なのか」^①——

芸術家以外には誰にも明白でない捉えにくい考え、

買ってしかも金銭にしがみつ়く唯一の売り手。

人は自らを表現してそれを知恵と称するのだから、人は愚か者ではない。何と
 いう考え!

「^{トラコンタイン}龍に似たコカトリスは、初めから完全に毒を備えている」^②が
 彼らは「もっと意識した芸術の薄明りに照らされていない」^③ 海蛇のいる地域
 とは対照をなすものとして現われる。

三十歳で、六十歳になったら忘れようとするようなものを、手に入れて、
 適切な言葉は見えず、諷刺は聞こえず
 というのも それは「糸杉の匂い」のように「脳髓の神経を強化する」^④ ので
 古典様式は酷く嫌悪して

「それには思慮深い精神が常に感じ取るあの悲しみの気配」^⑤ があって、
 「それは甚だ僅かで且つ甚だ多い」^⑥ のだが——
 彼らは自らの判断では 婦人の興味を掻き立てそうな類いの事を書く。
 言葉を構成するに到るアルファベットの文字の各々を 我々が崇めないのかど
 うか知りたがって——

〈法令〉に、経理係その他の全ての人の公言した声明に、従って——
 現に在る我々に相当するもの、となると
 愚かな男性：男たちは強力であり誰も何の注意も払わない、
 愚かな女性：女たちには魅力があり、何と彼女たちは人を悩ませることか。
 その通り、「著者とは素晴らしい人々」^⑦、であり、特に最高のものを書く人々は
 あらゆる言語の精通者たち、表現の超オタマジャクシたち。
 古代の繰り返し生ずる燐光に慣れて
 プラトンの「多くの気高い曖昧さと不明確な専門語」^⑧、
 エジプトのよく知られた光景に見られる王室専用船の澄んだ動き——
 王、乗務員、そしてハーブ奏者は船の真中に座っており、他方、翡翠と水晶は
 ぐらつきながら、針路を取って進んでいる、

それらの心地よさは 寄せ波を乗り越える——
 柳のような柔軟な機智、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルの透明な均
 等化。

「海の細部なき全体像」にうんざりして、繰り返し無邪気で、
 そしてその岩々の混沌ぶり——『ヘブル書』のもったいぶった見解——
 善良で澆漓たる青年たちが はっきり主張を示す、
 人を悩ましてきた者と交際する必要はないのだと。
 彼らは、証明するのが非常に容易だと思った所説は決して述べたことがないの

だ——

「壁にぶつけてガラスのように割れた」^⑧
 この「目眩くような印象の凝結物」^⑨の中では
 「ヘブライ語の無理強いされずに自然に湧き上る情熱——
 反響と大嵐のようなエネルギーに満ちた動詞の深淵」^⑩
 そこでは行動が行動を永続化し、角度が角度と矛盾し合って
 遂には漠然たる行動によって水中に沈められる、
 「色彩の底知れぬ示唆」^⑪によってばかされる、
 緑の、震動を伴った白の、絶え間なく喘いでいる幾本もの線によって、
 岩々につかる水の劇——この「急き立てる子音の大海」^⑫の中で
 その「長い緑色大理石板のような大きな青黒い染み」
 その「垂直な雷光の仄めく槍」^⑬と「呑み込まれる溶融した火」^⑭を備えて、
 「その防潮堤の上に泡」^⑮をつけて、
 「飛沫が長くしゅうしゅう音立てる中で碎け散ってゆく」^⑯。

—— *The Dial*, 74 (February 1923), 183-4,

[自注] ① Anatole France, *Petit Pierre* (1918),

② Southey, *The Young Dragon*.

③ A. R. Gordon, *The Poets of the Old Testament*.

④ 「糸杉もまた脳髓の神経を強化するようにみえる」。Landor, “Petrarca” in *Imaginary Conversations*. [『想像上の会話』]

⑤ 「Puttick と Simpson 両氏によって18世紀に広められた中国の芸術作品と磁器には、思慮深い精神が常に感じ取るあの悲しみの気配があった。それは甚だ僅かで且つ甚だ多い」。Arthur Hadyn, *Illustrated London News*, February 26, 1921.

⑥ Leigh Hunt's *Autobiography*.

⑦ James Harvey Robinson, *The Mind in the Making* (Harper, 1921).

⑧ 『デカメロン』, 「運命の気まぐれ」

⑨ A. R. Gordon.

⑩ P. T. Forsyth, *Christ on Parnassus* (Hodder and Stoughton).

⑪ George Adam Smith, *Expositor's Bible* (1890)

⑫ Leigh Hunt's *Autobiography* (1850).

ウィル・ハニカム (Will Honeycomb) : 1711年3月1日に、R. Steele と J. Addison が創刊し、1712年12月6日の555号まで続いた日刊紙 *The Spectator* の中で、この新聞を運営しているとされる仮想のクラブの一員。“the gallant Will Honeycomb, a gentleman” と呼ばれる。

コカトリス (cockatrices) : 鶏蛇。蛇が鶏の卵から孵したとされ、頭、足、翼は鶏で、胴と尾は蛇、という伝説上の怪物。これに見据えられると死ぬとされる。バシリスク (「セビレトカゲ」に現われている) 参照。

この作品、「〈善良で澁漚たる青年〉などと自らを主張するような流行を追う文学者たちに対する攻撃」(E. 71)である。そういう人々は、作家は自分が語っている事柄には親昵している必要があるなどとは思っておらず、故意に難解な作品を過度に大仰に分析することに従事して、単純な資料に依拠する作家に優越感を抱く (E. 71)。この詩で重視されるのは言語であり「無理強いされずに自然に湧き上がる情熱」、そしてムーアが特に重視し、その詩の主題にもしてきた鍛練、修養、ということになるだろう。

チリマツ The Monkey Puzzle

(CP. 80)

一種の猿か 松キツネザル

猿も興味を抱かない、

一種のフロベールのカルタゴで、それは人に公然と反抗する——

この「トカゲと一緒にパドヴァ猫」、この「竹藪の中の虎」。

「絡み合った幾らか」などということには それはなるまい。

狒犬を無視しよう、そうすればそれは忽ち犬以上のものになる、

その尾は悦に入った半螺旋状に自らに重ねて、

この松の木^①——この松の虎は、虎であって犬ではない。

それは知っているのだ もしも放浪者が威厳を持てるなら

ジブラルタルはもっと多く持っていたことを——

「不幸であるより孤独である方がましだ」ということを。

翡翠や硬石の研磨工の宝石彫刻作業を模倣して工夫された毬果植物、

この珍品収集の迂回路における真物の珍品、

それはそれと同じ重さの黄金の値打ちがあるが 誰もそれを

世間が途方もなく知らないでいるこういう森から取り出さないのだ、

比較すれば親切に思われてくるライオンの獐猛な菊の頭を。

このヤマアラシの針で刺された、込み入った紛れのなさ——

これは美なのだ——「最善の結果を与える、骨格の中の確かな釣り合い」^②。

人は、しかしながら、知ろうとして途方にくれている、何故それがここに、地上のこの陰鬱な地方にあるべきなのかを——

その起源を、いやしくも説明しようとして、

しかし我々は証明する、我々に自らの誕生の説明はつかないのだと。

—— *The Dial*, 78 (January 1925), 8.

[自注] ① *The Chile pine (Araucaria imbricata)*. Arauco は南チリーの一部。

② Lafcadio Hearn, *Talks to Writers* (Dodd, Mead).

チリマツ (monkey puzzle) : 南米チリの高地原産、ナンヨウスギ科の常緑針葉樹。枝が複雑に絡み合い、密生した枝に堅く鋭い葉を生じるため猿も登れないということからの命名という。

カルタゴ (Carthage) : 北アフリカ北部、今の Tunis 近くにあった古代都市国家。紀元前九～八世紀にフェニキア人が建国。146 B. C. にポエニ戦役の最終戦でローマ軍に滅ぼされた。「トビネズミ」にも、この時の将軍「アフリカヌス」への言及がある。ムーアの作品には、動植物に限らず、絶滅したもののへの痛烈な感情が常に潜・顕在する。Gustave Flaubert (1821-80) は、古代カルタゴに取材した浪漫性と抒情に溢れる歴史小説 *Salammbô* 『サランボー』(1862) を書いている。

パドヴァ (Padua) : イタリア北東部 Venice 西方の都市。Galileo が数学教授を努めた1222年創立の大学がある。

ジブラルタル (Gibraltar) : 英国の直轄植民地でスペイン南端近くの狭い半島にある要塞化された港町。スペインと英国の間に、戦争も含めて確執の歴史がある。

例にして例の如くと言いたくなるが、「松キツネザル」「松の虎」「トカゲと一緒にのパドヴァ猫」「竹藪の中の虎」等々と手を替え品を替えて形容されるこの「真物の珍品」の植物チリマツに魅せられた語り手によって、「この樹木に、環境の孤独を故意に選ばせているようにみえる、不敵なまでの不可解さ、真直ぐ伸びることへの抵抗を提示する」(E. 76) 詩である。「込み入った紛れのなさ」に、無論、「美」をみている故に魅了されているのだが、しかし本当に人

を当惑させるのは、その存在の理由である。締め括りの詩行「自らの誕生の説明はつかない」に、ヘレン・ヴェンドラーは、ムーアが、神意による運命予定説を横目で見ても自分なりの見解を出しているのかも知れない、と見ている (V. 80)。

*

本稿は、ムーアの、1932-34年の作品七篇と、1922-23年の作品四篇、それに1916年、1917年、1925年の各一篇の、計14篇を、邦訳紹介しながら、その作品の様相を垣間みたものである。その際、極く表面上の理解のために、無くもがなの最小限の訳注 (『ランダムハウス英和大辞典』第2版 [小学館]、『研究社新英和大辞典』他を参照して) と共に最も初期のムーア研究者 B. F. Engel の素直な解釈・解説を主に紹介した。

ムーアの、動植物への尋常ならざる思いの深さ、彼女が事物の本質を、その細部を具体的に、色、形、性状など詳細に描写しながら、洞察してゆくのに、種々様々な動植物の姿・生態の細密な観察が利用されること、連想を恣に展開しながら、知識とその時々を得る様々な情報を活用すること、色々な形の譬喩を自在に駆使すること、繁辞を極度に省いたモザイク手法、カタログ技法を用いること、などが顕著だと、本稿の作品群からだけでも判明する。ムーアが詩作で繰り広げてみせる〈動植物園〉は、実は〈人間〉解明のために、読者への詩人自身の〈訴えかけ〉のために、使われているのである。

注

1. 引用、言及書は以下のように略記し、そのページ表示を括弧内に数字で示す。
 CP. *The Complete Poems of Marianne Moore* (New York: The Macmillan Co./ The Viking Press, 1981)
 C. Bonnie Costello, *Marianne Moore: Imaginary Possessions* (Cambridge: Harvard University Press, 1981)
 E. Bernard F. Engel, *Marianne Moore* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1964)
 Mil. Christance Miller, *Marianne Moore: Questions of Authority* (Cambridge: Harvard University Press, 1995)
 Mo. Charles Molesworth, *Marianne Moore: A Literary Life* (New York: Atheneum, 1990)
 V. Helen Vendler, "Marianne Moore" in Harold Bloom, ed., *Marianne Moore* (New York, New Haven, Philadelphia: Chelsea House Publish-

ers, 1987) pp. 73-88.

2. 例えば “He 'Digesteth Harde Yron” 「彼『鋼鉄を消化する』」(CP. 99-100) などに。拙稿「輻輳を内蔵した〈擬装〉——マリアン・ムーアの世界」(本誌No24, 1993・8・31) に全訳あり。

尚、中国の文献については向嶋成美、ラテン語イタリア語などについては秋山学、作品初出時の本文確認については滞米中の鷺津浩子、の同僚各氏に教示を仰いだ。

Summary

In this paper, Marianne Moore's 14 longer poems are newly translated into Japanese by the present writer. They are, as it were, the zoological and botanical gardens of poetry, where various kinds of animals and plants present itself minutely described, being used as a variety of figures.

This paper suggests that Moore has variously and gorgeously used the animal and plant kingdom in order to elucidate the nature of human beings.